吉本隆明全著作集 11

吉本隆明全著作集

11

思想論 Ⅱ

勁草書房

吉本隆明全著作集11
昭和四七年九月三〇日第一刷発行
昭和四九年一〇月三一日第三刷発行
著者　吉本隆明
発行者　井村寿二
発行所　勁草書房
〔東京都文京区後楽二の二三の一五
電話番号八一四局六八六一　郵便番号一一二　振替口座東京一七五二五三番〕
印刷所　精興社
製本所　青木製本
＊定価は外函に表示してあります。
© 1972 by Takaaki Yoshimoto
落丁・乱丁本はおとりかえします
0390-886120-1836

目

次

全著作集のための序……五
序……一
禁制論……三六
憑人論……六三
巫覡論……八二
巫女論……一〇一
他界論……一一九
祭儀論……一三九
母制論……一六〇
対幻想論……一七九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

罪責論……二〇四
規範論……二三七
起源論……二五〇
後記……二七六
解題……二七九

思想論 Ⅱ

吉本隆明全著作集 11

共同幻想論

全著作集のための序

数えてみると、本稿を発表しはじめてから、すでに四、五年の歳月が過ぎている。こんど、全著作集に収録されることになった、と書きはじめてはみても、はっきりした誤植をできるかぎり訂正するほかに、格別の感慨が加わるわけでもない。また、現在、すこしは当時よりも詳細になった知見を動員して、補正したり、削除したりしてていさいをととのえることも、さほど本稿の意義を高めるものとはおもわれない。やればできないこともないが、もともと人間の共同観念の総体に向って、具体的に歩みよることをモチーフとした本稿は、まだ序の口にしかすぎないし、また、序の口としては完結しているので、補正や訂正は、あとの展開部がかき継がれる折に、自然に行われたことになっているという形のほうが好ましい気がする。

この四、五年のあいだに、本稿も、さまざまな評価をくぐってきたが、予想外の批判はわたしの眼に触れた範囲では、なかったとおもう。また、本稿が決定的な影響を読者に与えた、という証拠も見当らなかったといってよい。そうだとすれば、まだ声を挙げない読者に、寄与したことを信ずるほかないのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本稿の基本になっているわたしのモチーフは、具体的な場面では、ふたつあった。ひとつは、個々の人間が、共同観念の世界、たとえば政治とか法律とか国家とか宗教とかイデオロギーとかの共同性の場面に登場するときは、それ自体が、相対的には独立した観念の世界として、扱わなければならないし、また扱いうるということである。そう扱わないことから起る悲喜劇は、戦争期にしこたま体験してきたし、また、本稿の発表から現在までの四、五年のあいだにも、まざまざと体験したことであった。当然このことと関連するわけだが、もうひとつのモチーフは、個々の人間の観念が、圧倒的に優勢な共同観念から、強制的に滲入され混和してしまうという、わが国に固有な宿業のようにさえみえる精神の現象は、どう理解されるべきか、ということである。この問題に理論的にも感性的にも決着をあたえたかったが、この方はそれほど巧くいっていない。

この問題は、一見すると観念の〈未開〉性一般のなかに解消するようにもおもわれるし、また、マルクスのいわゆる〈アジア〉的というカテゴリーに、包括されるようにもみえる。もちろんこの問題は東洋学者、ウィットフォーゲルが、わが国を除外例としたところのものである。ウィットフォーゲルが、わが国を〈アジア〉的という概念からの除外例とした理由は、わたしが勝手にアレンジしてみればふたつに帰せられる。ひとつは可成り初期の段階から、わが国の農耕民が、自作農的な私有耕作をやっていたことであり、また、もうひとつはインドや中国のように〈アジア〉的専制を支えた大規模な水力灌漑のための工事や、運河の開拓などを必要としない地理的な特性をもっていたということである。

しかしながら、そういう外部からの客観的な接近の仕方や規定にたいして、ある部分で同意しながらも、ある部分で納得し難い個処がどうしても残される。こういう感性的な不満の根拠は、わが国家の内部に包括され、内部で感性的に体験し、内部から考察を加えるという位相に根拠をもつだけの薄弱なものであるかもしれない。

たしかに、わが初期国家あるいは部族共同体では、ある程度の私有墾田を、農耕民はもっていたし、村落共同体の内部で、わりあい平等に、個々の農耕家族は、それぞれの領有域と共有域の画定に参与することができた。これはまた初期国家の専制首長の権力と、抵触せずに処理しうる内閉性と自主性とを併せてもっていた。また、専制首長の側からは、耕作田の狭さ、また、島嶼的な条件からして、べつに大規模な灌漑工事や、運河開拓による交通の整備を必要としなかった。自然がこしらえた海上の交通路は、どんな運河を経由するよりも迅速なものであり、これはいたるところで内陸の奥への通路を可能にしたからである。では、ウィットフォーゲルは、おおすじのところで正当であったのだろうか。たぶん、そうではないのだ。文化と文明は、わが初期国家の首長たちにとって、大陸からの輸入品であった。この輸入品を購ない、これを分布させるための財力と権力としてのみ、専制の力量は発揮された、といってもよい。したがって、大陸からの文明と文化は、専制首長の周辺だけをとらえれば足りた。このことが、初期の〈法〉や〈国家〉の構成にあたえた影響は甚大であった。この文化的あるいは文明的な格差と外来性こそが、わが初期国家の権力構成に、

いわば〈観念のアジア〉的専制ともいうべき、独特の構造をあたえた、といってよい。ここに経済外の強制力としての〈アジア〉的専制の構造を、あきらかにするべき根拠のひとつがある。もうひとつ考慮に入れなければならないのは、地理的な条件からかんがえて、海辺の自然漁業と海運にたずさわっていた海部民と、農耕民と、山岳地帯の狩猟民とは、わが国の初期部族国家においては、相互に転化することができる変幻性をもっていたから、共同体の構成について、これらを〈類別〉することができず、むしろ多層的に混合しているとかんがえねばならないことである。海部民は、内陸に入れば農耕民や狩猟民として定着することができたし、それぞれの荷っている文化や宗教も多層化して、相互に混合することができた。名目的な首長は神格化されるが、実質的な行政力や政治支配は、別途の人格と回路に接続される独特の初期国家の構造は、この多層化と複雑化とが生みだしたものといえよう。政治的な諸制度の強制力を、共同観念のうちにみるかぎり、わが初期国家の成立過程に生じたこれらの問題は、アジアの沿海周辺部および島嶼における、内陸とはちがった〈アジア〉的特性のひとつの典型をなしている。現在の東南アジアにおいて、南部中国沿海部および中国大陸北辺の地域において、南洋上の諸島嶼において、大なり小なり、わが初期国家時代とおなじ類型を、みつけだすことができよう。

ようするに、共同観念の圧倒的な優勢のうちに、個々の農耕民と職別部民たちの意識が決定され

るという模型は、まだ、多くの不明な点と、具体的に考察され、理論的に解明さるべき余地を残しているが、その発祥の根拠は、現実的にか、理念的にか、あるひとつの共同体は、その上位に共同体を重層化するばあいに、もとになる共同体の編成をさしてこわさずに接合されうること、そして、もとの共同体の基層のところでは、これとは逆に、ひとつの共同体は、周辺の共同体を地域的に統合するという形で、たえず個々の成員と、統合された共同体との関係を規定しただろうということ、そしてこれらふたつの仕方が複合された形で、初期の国家が成立していっただろうということ、こういう複合は、アジアの周辺地域と島嶼地域では、大なり小なり普遍的であろうということ、に帰せられる。

したがって、ウィットフォーゲルのように、わが初期国家の在り方を単純化したくないならば、こう反駁すればよいのかもしれない。なるほど、わが国の初期部族連合国家の首長は、大規模な灌漑工事と、運河の開拓工事を請負う必要はなかった。だから徭役労働を、貢納金とひきかえに免除するという処置すら、かえって首長たちにとって喜ばしいものだったかもしれない。そこでウィットフォーゲルのいう「水力社会」は成立せずに、横にすべったため、典型的な〈アジア〉的専制を生みだすこともなかった。つぎに容易に封建社会への転化の道をたどることができた。しかしながら、このような見解には、どうしてもうさんくさい臭いがつきまとって離れない。そこでこう考えるべきではないか。わが初期国家の専制的首長たちは、大規模な灌漑工事や、運河の開拓工事をやる代りに、共同観念に属するすべてのものに、大規模で複合された〈観念の運河〉を掘りすすめざ

るを得なかった。その〈観念の運河〉は　錯綜していて、〈法〉的国家へゆく通路と、〈政治〉的国家へゆく通路と、〈宗教〉的イデオロギーへゆく通路と、〈経済〉的な収奪への通路とは、よほど巧くたどらなければ、つながらなかった。〈名目〉や〈象徴〉としての権力と、じっさいの政治権力と、〈宗教〉的なイデオロギーの強制力とは、別個のものであるかのように装置されていて、よほど、秘された通路に精通しないかぎり、迷路に陥こむように構成された。そこには、現実の〈アジア〉的特性は存在しないかのようにみえるが、共同幻想の〈アジア〉的特性は存在したのだ、と……。

もしも、共同的な観念に属する遺制は不可視であるため、かえって拭い去るわけにいかないとすれば、わたしたちの共同観念の内部には、いまも前古代的〈幻のアジア〉が住みついているかもしれないし、それはわが現在の国家の〈現実の非アジア〉と照応するものかもしれないのである。

本稿が発表されてから四、五年のあいだにさまざまな批判がなされたが、その批判は、おおむね、本稿のような試みが、一種の観念論への踏みはずしに属するものだという線に沿って行われた。もっとひどいのになると、自己の能力にあまるために、本稿のモチーフを把みとることができず、わたしの著作は、衝撃力を失っているという批判にまで、陥こんでいるのもあった。そうなれば、〈無智につける薬はない〉とでもいうよりほかない。どんな過渡的な社会でも、無智が栄えるためしはない、というのは、自他をともに束縛する鉄則である。どうして理解するための労力と研鑽を惜むものに、衝撃を与えることなどできようか。

序

言語の表現としての芸術という視点から文学とはなにかについて体系的なかんがえをおしすすめてゆく過程で、わたしはこの試みには空洞があるのをいつも感じていた。ひとつは表現された言語のこちらがわで表現した主体はいったいどんな心的な構造をもっているのかという問題である。もうひとつは、いずれにせよ、言語を表現するものは、そのつどひとりの個体であるが、このひとりの個体という位相は、人間がこの世界でとりうる態度のうちどう位置づけられるべきだろうか、人間はひとりの個体という以外にどんな態度をとりうるものか、そしてひとりの個体という態度は、それ以外の態度とのあいだにどんな関係をもつのか、といった問題である。

本書はこのあとの場合について人間のつくりだした共同幻想という観点から追及するために試みられたものである。ここで共同幻想というのは、おおざっぱにいえば個体としての人間の心的な世界と心的な世界がつくりだした以外のすべての観念世界を意味している。いいかえれば人間が個体としてではなく、なんらかの共同性としてこの世界と関係する観念の在り方のことを指している。この間の事情について、まえにある編集者の問いにこたえた記事がのこされているので、それを再

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com